道具は、生きている。手をかけて使い続ける。

般若 剛［漆器・彫刻］
Hannya Takeshi

引き出しにしまってあるノミの数々。形状、サイズなどで分類され、きれいに納められている。職人が使う本格的なノミは、鍛冶屋が鉄を鍛えて作るため、一般的な彫刻刀に比べて高価であるという。

すべてに道具を優先して

右手に強く握られたノミが、鯉のうろこを彫っていく。少し進むと、刃の大きさが違うノミに持ち替える。

「この鯉の盆で40本は使う。作品によって、使うノミが違ってくるんです」

高岡漆器の代表的な技法のひとつ、※彫刻塗。般若さんは、切り出しや※三角ノミなどを用いて、精緻な意匠を彫る。

彫刻師だった父善用（ぜんよう）氏の三男として生まれ、小さな頃から仕事を手伝い、20歳の時に、父のもとで本格的に仕事を始めた。その時から、自分の道具を持ったという。

「父親から、これはお前のノミにしろと言って渡された。父親は、自分のノミは絶対使わせなかったからね」

昔かたぎの職人だった父は、長男を跡継ぎとして考えていた。般若さんは、26歳で独立を決意。50本ほどのノミだけを持って、家を出た。

しかし、一人で仕事をするには、ノミの種類が足りない。

「それから、儲けたお金の大半は道具に化けた。生活も苦しかったけど、2本でも3本でもと、揃えていったんです」

400本は技と意欲の証明

独立した般若さんは、漆器彫刻だけでなく、新しい仕事にも挑戦した。欄間や美術銅器の木型なども手がけた。

「どれも独学で学んだ。仕事は、ひとつひとつが勉強。自分の体に残っていく財産ですからね」

やらなければ、それまでだから、と般若さんは語る。

展示会への出品も意欲的に取り組んだ。これまで、全国漆器展通産大臣賞など数々の賞を受賞している。

「若い時は、どんどんアイデアが出た。作りきれないほどね。塗師屋さんが難しいと言って塗ってくれないと、塗りも自分で学んで塗ったんです」

新しい仕事、新しい作品に挑むたびに、そのための道具が必要になる。

現在、般若さん自身で揃えたノミは、約400本。通常の彫刻の仕事であれば、200本あればできるという。

「私が大きいノミを持っているので、兄もよく借りに来ましたよ。こんなのは、1年に何回も使わないからね」

400本は、般若さんの挑戦の歴史であり、ものをつくる意欲の強さを物語る数字である。

切れ味は常に鋭く

新しいノミをおろす時、柄は職人自ら自分の体に合わせて作る。

「父親に習った手の感じ、胸の押す感じに、角度が合うようにつくります」

違う親方のノミは、使いにくいという。研ぎ方も違う。

栃の木など堅い材質のものは、切れ味が鈍くなるのが早い。15枚から20枚で鈍くなり、すぐに研ぐ。切れないノミでは仕事にならない。

「一日の仕事が終わったら、常時使うノミは必ず研いで箱にしまいます。父親の代からそうなので、もう習慣になっているんですよ」

よく使うノミは、自然と決まってきて、工房の棚の手の届きやすいところにしまってある。3分の2ほどは、1年でも余り使わないものだという。

そういうノミでも、時間があれば研いでおく。

「ノミは、放っておけば錆びるからね。錆びたら、それで終わり。ノミは、生き物だから。空気吸って、湿気吸ってね」

人間と同じだと般若さんは言う。

父と兄の道具を受け継ぐ

現在、般若さんの手元にあるノミは、約600本。平成9年に父が、17年に兄が亡くなり、二人が使っていたノミ200本を受け継いだ。

「兄も私も、父に習っているから、二人のノミはすぐ使えるんです」

跡継ぎだった兄は、子どもの頃から別格。般若さんとは、「天と地」ほど扱いが違ったが、「そんなものだと思って育った」と般若さんは言う。

兄も父から独立していた。高岡漆器伝統工芸士会長を務めた般若勉氏である。その二人の仕事を支えてきた、手の跡の残る道具を、般若さんの手が握る。

「昔のノミは、鉄がよく締まっているから、切れ味がいい。だから、父親のノミをよく使ってしまいます」

使い続け、研ぎ続ければ短くなる。それでも、使うようにしているという。

「供養にもなると思って使っているんですよ」

ノミは、それぞれの人生のように、三者三様の歴史を刻んできたが、どの刃も般若さんが手入れをし、美しく輝いている。三人の道具は、般若さんの技のもとにひとつになって、今日も力強く木を彫り続けている。

※彫刻塗
木地に彫刻を施し、漆を塗って立体感と独特の艶を出す。色漆による彩色技法、朱塗りしたあとにマコモ墨を入れて陰影をつける皆朱塗などがある。
※三角ノミ
高岡では、お盆などの薄い木地に彫刻を施すため、鋭角なノミでは使いづらかった。そのため、大正時代に、90度以上の三角ノミを独自に生み出した。般若さんの父善用氏は、考案者の和田慶治氏に師事した。

（右上・中）
曲げノミなど特殊なノミも多く揃えている。
（右下）
ノミの形、角度に合わせていろいろある研ぎ石。
（左）
おろす前のノミ。右3本が三角ノミ。続いて丸ノミ、平ノミ2本、左は小刀。

般若 剛 はんにゃたけし

昭和17年　高岡市生まれ（本名 武）
昭和37年　父善用に師事
昭和39年　富山県デザインスクール修了
昭和43年　独立し「般若剛木彫工芸所」設立
昭和55年　高岡市伝統工芸産業優秀技術者表彰
昭和59年　全国漆器展 通産大臣賞受賞
平成２年　伝統工芸士認定　加飾部門 彫刻
平成15年　高岡市伝統工芸産業技術保持者 指定 彫刻部門
平成19年　伝統工芸品産業功労者 表彰

（右）
鯉の盆を彫る般若さん。
（左）
般若さんの作品
「親子獅子」